〔川崎医療福祉学会ニュース〕

川崎医療福祉学会　第18回研究集会

平成12年6月7日(水)

研究発表

1．障害者の地域医療福祉圏域設定に関する研究
　— 重症心身障害児での検討 —
川崎医療福祉大学　医療福祉学部　医療福祉学科　○末光　茂　小池　将文
江草　安彦

2．感情のシステムとしてのDVと児童虐待
　— その治療的展望と課題 —
川崎医療福祉大学　医療福祉学部　医療福祉学科　○石川　瞭子

3．高校生の社会福祉意識の変容と福祉教育実践の効果性に関する研究
川崎医療福祉大学　医療福祉学部　医療福祉学科　宮原　伸二
川崎医療福祉大学大学院　医療福祉学研究科　医療福祉学専攻　○保住　芳美

座長　副島　林造

4．正常者における網膜固視点と網膜厚の検討
川崎医療福祉大学　医療技術学部　感覚矯正学科　○吉田　仁美　深井小久子

5．CAPD（腹膜透析）療法患者の日常生活について
川崎医療福祉大学　医療福祉学部　保健看護学科　人見　裕江　大澤　源吾
竹田　恵子
川崎医療福祉大学大学院　医療福祉学研究科　保健看護学専攻　○田中　福恵
川崎医科大学附属病院　宮脇　敏代　三島　洋子
丸橋　民子
重井医学研究所附属病院　山本由珠子

6．高齢者のNK細胞活性を高める要因
川崎医療福祉大学　医療福祉学部　保健看護学科　○人見　裕江　大澤　源吾
川崎医療福祉大学　医療福祉学部　医療福祉学科　宮原　伸二
川崎医療福祉大学大学院　医療福祉学研究科　医療福祉学専攻　中村　陽子

○印は口演者

学会運営委員長挨拶　寺尾　章　教授

研究発表要旨

障害者の地域医療福祉圏域設定に関する研究
― 重症心身障害児での検討 ―

川崎医療福祉大学　医療福祉学部　医療福祉学科　　末光　茂　小池　将文
江草　安彦

重症心身障害児での，一次医療福祉圏域は市町村レベルで家庭医，訪問看護・リハビリ，ヘルパー派遣，二次医療福祉圏域は人口約30万人の広域市町村圏域で専門外来診療と重症児通園等，そして三次医療福祉圏域は都道府県域で専門入院および措置入所を提供できるシステム構築を，岡山県の実態に基づき提示した．重症児通園事業については，一都道府県にA型1カ所，B型3カ所という国の目標は人口100万人規模で妥当だと指摘した．

感情のシステムとしてのDVと児童虐待

川崎医療福祉大学　医療福祉学部　医療福祉学科　　石川　瞭子

愛憎．家族であるがゆえに決着のつかない心模様．くりかえされる家庭内の暴力と虐待を家族内の愛憎のあらわれとみる時，おおくは「憎」を強く意識するにちがいない．しかし，それらの行為は偽解決のパターンであったとしても，その時の家族がもちえた唯一の解決策であった可能性もある．本報告はDVと児童虐待，その中でも特に深刻な問題をのこすといわれている性的虐待をとりあげ，感情のシステムとしての家族の様態をしめし，ついで解決の方向を提案したい．

高校生の社会福祉意識変容と福祉教育実践の効果性に関する研究

川崎医療福祉大学　医療福祉学部　医療福祉学科　　宮原　伸二
川崎医療福祉大学大学院　医療福祉学研究科　医療福祉学専攻　　保住　芳美

高校生に対する福祉教育の意義を，1年間の教育実践における意識調査の結果から考えた．社会福祉は地域住民と行政の協力というイメージが高まり，また，福祉の捉え方のイメージにおいても明るいや暗いは減少し，今はどちらとも言えないが増加した．そして，現状をみつめるようになったという意見が多くなった．今後は，この生徒達が卒業し，進学あるいは就職をしていく過程を追跡調査したいと思っている．

正常者における網膜固視点と網膜厚の検討

川崎医療福祉大学　医療技術学部　感覚矯正学科　　吉田　仁美　深井小久子

〈目的〉正常者の中心窩反射が解剖学的中心窩と一致するかを分析した．〈方法〉網膜固視点の分析には内田式視標付無散瞳眼底カメラ，中心窩反射と解剖学的中心窩の検討には網膜厚測定装置を使用した．〈結果〉正常者の87%は中心固視，13%は固視点が中心窩から平均鼻側0.5°上側0.4°にあった．網膜厚は上鼻側が薄い傾向があった．〈考按〉正常者の固視のずれは，中心窩反射と解剖学的中心窩が一致しないためにおこると考えた．

CAPD（持続的携帯型腹膜透析）患者の日常生活について

川崎医療福祉大学　医療福祉学部　保健看護学科　人見　裕江　大澤　源吾
竹田　恵子
川崎医療福祉大学大学院　医療福祉学研究科　保健看護学専攻　田中　福江
川崎医科大学附属病院　宮脇　敏代　三島　洋子
丸橋　民子
重井医学研究所付属病院　山本由珠子

CAPD 療法者426組（回収率60.9%）に，患者からみた家族関係の良否を主軸に患者のセルフケア能力（本庄，1997），患者と家族の生活の質（WHO26，1997），家族の生活力量（高階ら，1997）を調査した．家族関係が良い群は，体調・ADL・情緒の点で安定し，セルフケア能力，患者と家族の QOL 平均得点，生活力量が高かったが，関係が良くない群では低かった．CAPD 療法の継続には，患者のセルフケア能力と家族関係とが深く影響しており，看護において，家族関係の良否に注目した介入が求められることが示唆された．

高齢者の NK 細胞活性を高める要因

川崎医療福祉大学　医療福祉学部　保健看護学科　人見　裕江　大澤　源吾
川崎医療福祉大学　医療福祉学部　医療福祉学科　宮原　伸二
川崎医療福祉大学大学院　医療福祉学研究科　医療福祉学専攻　中村　陽子

高齢者の免疫力の指標としての NK 細胞活性値（NK と略す）に影響する身体的要因を調べた．O 県 K 市にある 2 つの公民館地域の老人クラブ（男：A 群，女：B 群）・シルバーコーラス（女：C 群）に参加する65歳以上の高齢者で，質問紙（健康習慣・WHO26等）への記載と血液検査，NK 平均値の t 検定，年齢，BMI，血圧，生化学検査との相関を分析した．NK は A 群53.4±16.1%，B 群52.7±14.0%，C 群55.2±12.8%で，平均値の差は認められなかった．C 群のコーラス前後の NK とアルブミン値との間に各々相関（前 $p<0.05$，後 $p<0.01$）が認められた．